＜学会動向＞

ＩＥＡ第５回世界会議に参加して

小　山　洋　司

国際経済学協会（International Economic Association，略称ＩＥＡ）とは何か(1)．正直なところ，筆者自身昨年５月日本経済学会連合から案内状をもらうまで知らなかった．ＩＥＡは1950年にユネスコ（国連教育科学文化機構）のもとに創設された組織で，現在加盟団体の数は46に達しているとのことである．日本には経済学関係では30の学会があり，それが集まって日本経済学会連合を構成している．世界各国に存在する同様の組織が一緒になってユネスコのもとにＩＥＡを構成している，と理解したらまちがいないのではないか．このＩＥＡには資本主義諸国だけでなく社会主義諸国の経済学者の全国組織も加盟しており，したがって近代経済学，マルクス経済学等々を問わず，すべての経済学者を包括する組織になっている．創設以来それまでに４回の世界会議がもたられ，第１回は1956年にローマで（参加者約400名），第２回は1962年にウイーンで（600名），第３回は1968年にモントリオールで（700名），第４回は1974年にブダペストで（1800名）開催されたとのことである(2)．

第５回世界会議は東京で日本経済学会連合，学術会議，統計研究会の共催のもとに，1977年８月29日から９月３日まで「経済成長と資源」を統一テーマとして開かれることになった．われわれが受けとった案内状はこの東京で開かれる第５回世界会議への参加呼びかけであった．なお参加費は１人２万円（７月１日以前に払込む人には１万5000円に割引くという特典あり）であった．これだけではいくら関心があっても参加する気にはならない．これと並行して，文部省学術国際局より，国際会議参加者への旅費支給のための資料を作るので参加希望者は申し出られたいとの通知があったので申し込んだところ，幸いにも通常の研究旅費とは別枠に旅費が支給されることになった．かくして，第５回世界会議に参加することとあいなったのである(3)．会議日程は次のようになっていた．

---

(1) 国際経済学協会は国際経済学の協会という意味で理解されるべきではなく，国際的な経済学協会という意味で理解されるべきである．――念のため．

(2) Asahi Evening News（以下，ＡＥＮと略），August 31，1977，Special Supplement.

(3) なお筆者のほかに，本学経済学科からは岩田，重森，松永，北原の４氏が参加した．

月　日	午　前	午　後	夜
8月28日（日）		登　録 14：00	
29日（月）	登　録・開会式 8：00　9：30	全　体　討　議 11：00～18：00	主　催　者 レセプション18：30
30日（火）	全　体　討　議 9：00～16：30		
31日（水）	研究報告・分　科　会 9：00～18：30		
9月1日（木）	研究報告・分　科　会 9：00～22：00		
2日（金）	スタディ・ツアー		
3日（土）	全　体　討　議 9：00～12：30	閉　会　式 12：30	バンクェット 17：00

世界会議は東京の港区芝にある東京プリンス・ホテルで開かれた．この世界会議へは初日だけでも1398名（67カ国，うち外国からの参加者691名，日本からの参加者707名）が参加したとのことである(4)．日本の経済学界としては，明治以来，日本が受け入れるはじめての大規模な，総合的な国際会議だ，ということである．これだけ大がかりの国際会議を成功させるために，現地組織委員会（委員長都留重人氏）はずいぶん苦心（とくに財政面で）されたと聞いている．開会式は3階のデラックスなプロヴィデンス・ホールで開かれた．この世界会議では英語，フランス語，日本語が公用語とされ，同時通訳を聴くためのイヤ・ホーンが全員に渡された．まずはじめに会長のエドモン・マランヴォー氏（パリ大学教授）が開会のあいさつをしたのち，日本学術会議会長の越智勇一氏が歓迎の言葉を述べ，ついで経済企画庁長官倉成正氏とユネスコの社会科学国際振興部部長V．ムシュヴェルニエラーゼ氏から祝辞をうけて開会式は終った．

30分の休憩ののち同じ会場で全体討議が始まった．全体討議のテーマと発言者は次の通りである．

8月29日

第1部

報告者　モーゼス・アブラモヴィッツ（米）：急速な成長の潜在力とその実現――戦後期における資本主義経済の経験――　予定討論者 大川一司（日本），R・ストウン（英）

座長　R・C・O マシューズ（英）

(4) AEN, August 31, 1977, Special Supplement.

第２部

報告者　Ｌ・バッチャ（ブラジル）：クズネッツ曲線をのり越えて――成長と不平等の変化――　予定討論者　オッド・オークルスト（ノルウェー），オレグ・Ｔ・ボゴモロフ（ソ連），コンスタンティーノ・リューク（スペイン）　座長　フリッツ・マハループ（米）

第３部

報告者　ジョフリー・ヒール（英）：枯渇する資源の価格の長期変動　予定討論者　ベラ・チコス＝ナジ（ハンガリー），ゲオルク・ヴィンクラー（オーストリア）　座長　エリック・ルンドベルグ（スウエーデン）

８月30日（火）

第４部

報告者　Ｔ・Ｓ・ハチャトゥーロフ，Ｎ・Ｐ・フェドレンコ（ソ連）：計画的成長と資源の合理的利用　予定討論者　マイケル・ケイザー（英），高山アキラ（日本）　座長ヴィクトル・ウルクィディ（メキシコ）

第５部

報告者　Ｋ・Ｎ・ラージ（インド）：発展への障壁　予定討論者　ベラ・バラッサ（米，世界銀行），ヴィクトル・ウルクィディ（メキシコ）　座長　ヘルベルト・ギールシュ（西独）

第６部

報告者　エドモン・マランヴォー（仏）：経済成長のコスト　予定討論者　アミヤ・Ｋ・バグチ（インド），フランコ・モジリアニ（米），都留重人（日本）　座長　ベラ・チコス＝ナジ（ハンガリー）

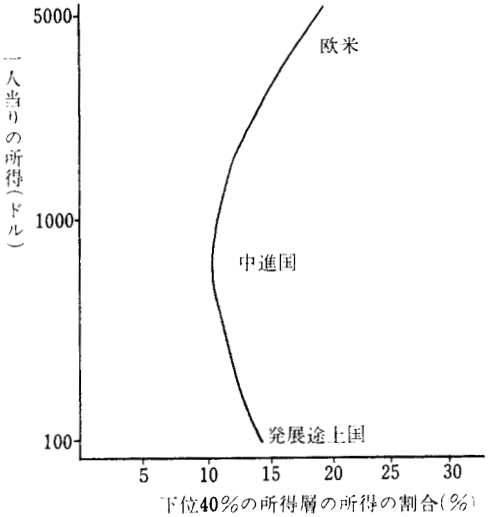
全体討議のあらすじを，参加者全員に無料配布された Asahi Evening News を参照しながら，次に再現してみよう．

アブラモヴィッツ教授（スタンフォード大学）の報告の要旨は次のようなものであった．戦後の資本主義経済の高い成長は新しい技術のスムーズな導入，労働と資本の再配分，資本の蓄積を通じて実現されたが，これらすべては次の２つの要因によって促進された．すなわち，「生産的知識とテクノロジーの拡大」およびアメリカに追いつきたいという他の諸国の願望．しかしながら，これらの有利な諸条件はいまや消滅しつつあり，資本主義諸国は過去におけると同じほど高い成長を維持することはもはやできない(5)．

(5)　ＡＥＮ，August 30，1977.

第2報告はL・バッチャ教授（ハーヴァード大学客員教授）の「クズネッツ曲線をのりこえて――成長と不平等の変化――」であったが，筆者は不勉強のせいで「クズネッツ曲線」なるものをこのときまで知らなかった．何やら難しそうな感じがしたが，説明を聞くと，比較的容易に理解できた．サイモン・クズネッツが1955年にはじめて，所得の不平等と人口1人当りの所得との相互関係について認めたもので，所得分配の均等化の議論に関連している，とのことである．バッチャ教授の論文に掲載された図を簡略化すると，次のようになる．ヨコ軸に下位40%の所得層の所得が国民所得のなかでしめる割合，タテ軸に人口1人当りの所得をとり，世界各国のそれらの値いを点にすると，放物線状の曲線が得られるが，これがクズネッツ曲線だとのことである(6)．

クズネッツ曲線，1960年代(7)



バッチャ教授の報告の要旨は次のようなものであった．クズネッツ曲線は所得分配を扱うさい有効である．この曲線は，ある国における所得不平等は人口1人当りの所得があるレベルまで高まるまで増大し，その後，所得分配はより公平になるということを示している．この転換点は1人当りの所得1000ドルである(8)．

ジョフリー・ヒール教授（サセックス大学）の報告は鉱物資源の価格の長期変動について

(6) 第5会世界会議全体討議報告集の P－II Edmar L. Bacha, The Kuznets Curve and Beyond : Growth and Changes in Inequalities, pp. 1－3.
(7) *Ibid.*, p. 8.
(8) AEN, August 30, 1977.

数学を駆使して論じたものであった．非常に難解であったため，残念ながら内容を紹介することはできない．

全体討議の２日目はソ連の２人の経済学者Ｔ・Ｓ・ハチャトゥーロフとＮ・Ｐ・フェドレンコ（２人ともソ連邦科学アカデミーの正会員）による共同報告であった．報告にたったのはハチャトゥーロフの方で，彼は強いロシア語なまりの英語で話した．報告の要旨は次のようなものであった．工業生産のたえず増大する規模は高まる成長率と結合して，資源確保の問題をますます尖鋭にしている．このような状況においては，最も重要なことは資源の浪費を減らしながら資源を経済的，計画的かつ包括的に利用することである(9)．

Ｋ・Ｎ・ラージ教授（インド開発研究センター教授）の報告の要旨は次のようなものであった．発展への障壁は基本的には政治的なものである．貧しい国々は国際経済関係の現在のシステムによって課せられる障壁を強調しがちであるが，富んだ国々は貧しい国々における特権階級の存在に注意を向けている(10)．

フランス語でなされたマランヴォー教授の報告の要旨は次のようなものであった．経済成長のコストは２種類に分けることができる．すなわち，「生産の物理的コスト」と「成長の社会的コスト」である．最も適切な成長をとげるために必要なことは，成長の社会的コストの負担と「人々の必要または希望の充足」とのつり合いをとることである(11)．

予定討論者と報告者との議論のやりとりの模様を全部紹介する余裕はないが，興味をもったことを少しだけ紹介しよう．６部にわかれた全体討議のうち最も白熱した議論がかわされたのはバッチャ報告をめぐってであった．このバッチャ報告にたいして鋭い批判を加えたのはソ連のボゴモロフ（科学アカデミー会員，社会主義世界体制経済研究所長）であった．ボゴモロフはあらかじめて印刷してあったペーパーを，強いロシア語なまりの英語で，ところどころはしょりながら読みあげたが，彼の批判の要点は次の通りであった．クズネッツ理論は，それが社会的諸関係と社会制度を無視しているが故に，無意味である．社会主義こそ所得分配を平等にする唯一の道である(12)．

これにたいして，バッチャ教授は，発展途上国が所得分配をより公平にしようとするなら革命が必要であるという考え方を否定し，チリの事例が示しているように，失敗した革命は人々に大きな損失をもたらす，と反論した(13)．

第２日目の討論でおもしろかったのはソ連の学者の報告をめぐる議論である．ハチャトゥーロフとフェドレンコの報告は，計画経済であればうまくいくのだとして社会主義諸国の経験を自画自讃しているようで，楽観的すぎるような印象を筆者はうけたが，やはりマイケル・ケイザー（オックスフォード大学セント・アンソニー・カレッジの Reader）もその点を

(9)　ＡＥＮ，August 31，1977.
(10)　ＡＥＮ，August 31，1977.
(11)　ＡＥＮ，August 31，1977.
(12)　ＡＥＮ，August 30，1977.
(13)　ＡＥＮ，August 30，1977.

ついた.

彼は両アカデミー会員による報告を論評して,「技術的楽観主義」および「資源配分のためのメカニズムとしての分権的価格形成にたいする集権的計画化の選好」という2つの言葉によって特徴づけた(14). そして現実はそれほど楽観的ではないことを説明しようとして,フォード財団の基金にもとづいてセント・アンソニー・カレッジで彼自身が指導しておこなった研究プロジェクトの調査結果を紹介した. このプロジェクトは,社会主義的計画経済の典型としてのチェコスロヴァキアおよびそれと比肩する資本主義的市場経済のオーストリアを比較研究の対象とした. この両国が選ばれた理由は資源賦存の類似,同じような成長率,同じような発展水準,共通した社会的・歴史的背景によるとのことである. そして18の産業部門について,両国の投入係数を比較検討する. 天然資源の消費はチェコスロヴァキアにおいては18部門のうち8部門までがオーストリアより多いのにたいして,オーストリアではわずか4部門だけがチェコスロヴァキアより多かった(6部門はほぼ同等)(15). このことをもって,ケイザーはチェコスロヴァキア経済の,すなわち社会主義計画経済の非効率性を論じたのである. 彼はそれからエネルギー問題に話をしぼり,ソ連・東欧のエネルギー事情の将来の展望について,CIAが1977年4月に発表した調査報告を引用しながら,両アカデミー会員が言うほどには楽観的ではない,と論じた(16).

これにたいして答弁にたったハチャトゥーロフは,さきほどのプロジェクトの調査結果には問題があると指摘し,そしてソ連・東欧のエネルギー事情については次のように言うのであった. どの国の政府にも必ず影の部分がある,ということはわかる. だが,その調査報告はいったいどんなスパイの報告にもとづいてまとめられたのだろうか. わが国に関することならわが国が発表するデータが十分信頼できるのである,と.

ところで,「どの国の政府にも」と言ったとき,当然それはソ連政府も含むことになり,会場から爆笑がおこり,ハチャトゥーロフ自身も思わずつりこまれて笑い出すという一幕があった. 最後に,ケイザーがとくに発言を求めて,どうも自分がCIAのエージェントであるかの如き印象をたれたかもしれないが,ソ連が十分データを公表してくれないからやむなくCIAの報告に頼ったのだ旨,弁明した.

3日目から分科会にわかれて討論がおこなわれた. 各分科会の招待論文の報告者は次の通りである(寄稿論文の報告者については省略).

第1分科会 過去の経済成長とその測定

デーヴィッド・S・ランデス(米):「グレート・ドレイン」と工業化——歴史的視野で見

(14) M.C. Kaser, Comments on "Planned Growth and Rational Utilization of Resources" (T. S. Khachaturov and N. Fedorenko), p. 1.

(15) *Ibid.*, pp. 2−3.

(16) *Ibid.*, p. 5.

れば商品は周辺から中心に向かって流入する.

フィリス・ディーン（英）：産業革命における経済成長率と生活水準の測定と解釈の諸問題

アンガス・マディスン（英）：資本主義的発展の諸局面

シオドー・W・シュルツ（米）：人間の価値増大の経済学

ドナルド・マクグラナハン，エドゥアルド・ピサロ，クロード・リシャール（国連，ジュネーヴ）：経済成長に関連した社会発展の測定

G・ソローキン（ソ連）：経済成長の指標に関連した方法論上の諸問題

ウィルフレッド・ベッカーマン（英）：「測定可能な経済的福祉」の成長率比較――若干の試算――

ルネ・ベルトラン（ＯＥＣＤ）：経済的に発展した国々における成長の測定――問題および展望――

B・ブラズィック＝メッツナー，ゲッツ・シュライバー（世界銀行）：発展途上国における経済成長の測定――問題，結果，含意――

デレク・W・ブレイズ（ＯＥＣＤ）：われわれは発展途上国における生産高のレベルと成長について何を知っているか？　とくにアフリカに関する批判的分析

ホリス・チェネリー，モイーゼ・シルクァン（世界銀行）：産業成長の比較分析

ヤイール・ムンドラク（イスラエル）：経済成長との関連における農業発展

イルマ・アーデルマン，シンシア・タフト・モリス（米）：19世紀および20世紀初頭における貧困の推移の研究

ケイス・グリフィン，アジズール・ラーマン・カーン（ＩＬＯ，ジュネーヴ）：発展途上国における農村の貧困――とくに現代のアジアに関する諸傾向の批判的分析

第２分科会　経済成長の諸要因

ケネス・E・ボウルディング（米）：進化論的システムとしての経済発展

ヨーゼフ・ゴールドマン（チェコスロヴァキア）：社会主義のもとでの経済成長のカレツキー・モデルのコンテクストにおける投資の役割

ジョン・W・ケンドリック（米）：総投資，資本，そして経済成長

エーリッヒ・シュトライスラー（オーストリア）：投資の経済成長依存モデル，再説

ラグナール・ベンツェル（スウェーデン）：1870年から1975年に至るスウェーデンの経済成長のヴィンティジ・モデル

イェルエン・H・ヘルティング（デンマーク）：雇用水準と経済成長率について

エドウィン・マンスフィールド（米）：アメリカの経済成長における技術変化の役割

G・N・チェルカッソフ，V・V・ソミンスキー（ソ連）：科学・技術進歩と経済発展

パウロ・ロベルト・ハッダド（ブラジル）：天然資源と地域開発――ブラジルの経験からの教訓――

ヴァーノ・W・ラッタン，ハンス・P・ビンスワンガー，ユージロー・ハヤミ（米）：農業

における誘発された技術革新

リチャード・R・ネルソン（米）：研究，開発，知識，および外部性――諸製造工業間の異なる生産性上昇率の謎への一つのアプローチ――

エヴゲニー・カプスティン（ソ連）：経済成長と労働生産性

マリアン・オストロフスキー，ズジスラフ・L・サドフスキー（ポーランド）：半ば発展した状況における成長要因と戦略選択

W・フライヒス，K・キューブラー（西独）：経済成長の一要因としての部面別投資規制

ゲルハルト・フエルス，フランク・ヴァイス（西独）：成長する開放経済における構造変化――西独の教訓――

第3分科会　将来の経済成長のための資源

マルク・オスターリート，エリック・フェルライト，ジャン・ヴェルブレック（ベルギー）：発展途上国における農業と成長――農産物価格と農業取引バランスとの間のトレード・オフに関する実験的研究――

ジョセフ・クラッツマン（仏）：世界の食糧生産を増産させるための資源

C・J・ブリス（英）：低開発国の状況における生産性賃金と栄養

ティヤリング・クープマンス（米）：枯渇する資源から再生可能またはまたは枯渇しない資源への移行

モゲンス・ボーゼラップ（デンマーク）：「枯渇する資源」というものは本当にあるのか？

W・サッシン，W・ヘーフェレ（オーストリア）：技術，天然資源，経済成長

ブルーノ・フリッチ（スイス）：ゼンカップ計画――代替的エネルギー戦略の将来の主要な要件――グローバルな展望

マリアン・ラデツキー（スウェーデン）：工業用鉱物資源の長期的なグローバルな供給は十分であろうか？　鉄，アルミニウム，銅の事例研究

アルベルト・クアドリオ＝クルジオ（伊）：地代，再生産不能の生産手段，成長

A・アンチーシキン（ソ連）：生産諸要因と経済成長率の相互作用

パーサ・ダスグプタ，ジョセフ・スティグリッツ（英）：市場構造と研究開発

ネイサン・ローゼンバーグ（米）：技術，天然資源および経済成長

レオン・タバ（国連）：われわれは世界の人口学的状況における転換点にたっているのだろうか？

第4分科会　経済成長，経済政策および制御の展望

ポール・ストリーテン（英）：歴史的視野で見た発展の考え方――発展への新たな関心――

ティボール・シトフスキー（米）：変化する消費者の嗜好は資源を節約することができるか？

J・O・N・パーキンス（オーストラリア）：マクロ経済的政策と経済成長

リオネル・ストレル（仏）：適度な成長を伴なう経済管理
D・J・デリヴァニス（ギリシア）：成長を阻害する相互に依存したボトルネックの終局的解決
M・ミエシチャンコフスキー（ポーランド）：発展した諸国の経済成長についての展望――マルクス主義的観点――
A・G・アガンベギャン（ソ連）：シベリアの資源の開発とソ連の経済成長の展望
ミハリ・シマイ（ハンガリー）：国際経済的諸関係と経済成長――諸問題と潜在的可能性―
タマス・モルヴァ（ハンガリー）：経済成長の諸要因――構造的政策――

第５分科会　国際分業および経済発展における協力
ヨーゼフ・パイェストカ（ポーランド）：経済発展の諸要因と新しい国際経済秩序
S・チャクラヴァルティ（インド）：発展理論と新しい国際経済秩序
ボリス・S・フォーミン（ソ連）：国際分業および経済発展における協力
ベラ・バラッサ（米，世界銀行）：比較優位への一つの「段階論的アプローチ」
H・ミント（ビルマ）：低開発国の輸出と経済発展
リカルド・ラング（ユーゴスラヴィア）：南北関係と経済発展
J・レスルヌ（仏）：ＯＥＣＤ／国際分業についての将来の研究
ヘンドリク・S・ハウタッカー（米）：コブ＝ダグラス型生産函数をもったヘクシャー＝オリーン・モデルの構造と解決
G・コールマイ（東独）：国際分業と国際的価値――社会主義的観点――
W・M・コーデン（オーストラリア）：変動相場制と世界経済の統合
ジャン・C・ベナール（仏）：発展途上国の輸出のための価格インデクセーションの効果についてのモデル
ホルヘ・カッツ（アルゼンチン）：技術と加工輸出――アルゼンチンの経験のミクロ経済的研究――

第６分科会　日本に関連した成長と資源問題
大川一司（日本）：過去の経済成長――西欧の事例と比較した日本の事例――
マーティン・ブロンフェンブレナー（米）：日本の経済成長の「限界効率」理論
デイル・W・ジョーゲンソン，ミエコ・ニシミズ（米）：1952～1973年のアメリカと日本の経済成長――国際比較 ――
行沢健三（日本）：1953～1972年のアメリカと日本の工業における比較労働生産性と市場規模
今井賢一，植草益（日本）：日本における産業組織と経済成長
R・ザネレッティ（伊）：資本蓄積と経済成長――イタリアと日本の比較――
金森久雄（日本）：日本の経済成長と経済的福祉

佐藤和雄（米）：日本では技術進歩は加速したのか？　成長の説明の誤謬
レミ・プリュドム（仏）：日本における環境政策の評価
宮本憲一（日本）：日本における環境保護政策小史および評価
安場保吉（日本）：日本の発展における資源
ステュアート・カービー（英）：日本の原料ニーズにたいする大陸東南アジアの資源の潜在的可能性
向坂正男（日本）：日本における経済成長とエネルギー
西川潤（日本）：「資源の制約条件」：日本経済の一つの問題
ドナルド・J・ダリ（カナダ）：日本の経済発展――1970～1976年の原料価格高騰への対応

これらの分科会のうち日本経済を扱った第6分科会だけは英語と日本語との間の同時通訳があった．残りの分科会では同時通訳はなく，英語で話したくても話せない日本人のために必要に応じて日本語から英語への事後的な通訳がなされ，英語が話せても話したくないフランス人のためには必要に応じてフランス語から英語への事後的な通訳がなされた（フランス語については，第1分科会も同様）．要するに英語をベースにして討論がおこなわれた．だが，たとえば，こんなこともあった．第4分科会のギリシァのデリヴァニス教授の場合，英語で報告をおこなったが，フランスの学者がフランス語で質問をしたあと通訳が質問の趣旨を英語に直すと，そのあと，そのあとこんどはデリヴァニス教授は質問者がフランス人なのでフランス語でお答えしますと言ってから（この部分だけ英語なのでわかったが），流暢なフランス語で回答するのであった．このフランス語によるデリヴァニス教授の回答は英語には直されないまま，それで終った．

筆者は第4分科会に出席した．一応第4分科会に属したけれども，筆者は他の分科会に興味ある報告があると抜け出して聞きに行った．ほかの多くの参加者も同様にハシゴをしていたようであった．筆者が聞いた報告のすべてを紹介する余裕はとてもないので，筆者が重点的に聞いたソ連の学者の報告について簡単に紹介しよう．

8月31日の午後の部では第1分科会へG・ソローキン（ソ連邦科学アカデミー准会員）の報告を聞きに行った．筆者は以前彼の論文を読んだことがあるので彼の報告にはかなりの期待をもっていた．だが卒直に言って期待はずれであった．彼の報告の番になって演壇に立ったのはソローキンではなく，ソ連の代表団の秘書をつとめているらしい若い女性であった．彼女はまずはじめに I'm not a professional interpreter. と断ってから，ソローキンの英文のペーパーを代読した．ソローキンの報告の要点は，封建制，資本主義，共産主義など，どんな経済的構成体においても経済成長はそれ自身の客観的法則によって規定され，従って，われわれは歴史的過程を支配する諸法則を反映する指標の体系をもつ必要がある[17]，

---

(17) G. Sorokin, Methodological Questions Bearing on Economic Growth Indicators, p. 1.

というもので，それを例証するものとして３つの表が提示された．

そのあと，座長のマシューズ教授に前日予定討論者をひきうけるように要請されたという人（名前不明）がソローキン報告にコメントを加えた．彼はソローキン報告は難解であったがおもしろかったと敬意を表しつつも，各表の難点を次のように指摘した．第１表（18品目の１人当り生産高について，ソ連，イギリス，アメリカ，西独，フランス，日本を比較したもの）にかんして，品目の選択の原則がわからない．社会主義は資本主義よりも高い生産力水準にあるべきだとの前提からきているようであるが，比較という目的のためには無意味である．第２表（以下に掲げる）は，経済的進歩を示すものとしてはあまりよい指標ではない．

過去の労働と直接的労働の投入の指標，１トン当りの時間[18]

時　　代	石　炭	銑　鉄	砂　糖
1. 封建制	100	100	100
2. 資本主義：			
a）独占段階以前	63	59	23
b）独占段階	53	14.3	11
3. 社会主義	27	4.0	3.2

注）この表は1930年代におこなわれた計算にもとづいている．

あまりに高すぎるか，低すぎると言える．拡大再生産の諸条件を示すものとして部門間バランス表から作られた第３表（1959年，1966年，1972年の各年度について，(1) 減価償却フォンド総額をうわまわる生産手段生産の余剰額，(2) Ｉ部門における減価償却フォンドをうわまわる生産手段の余剰額，(3) II部門の生産物をうわまわる国民所得の余剰額，(4) 必要生産物をうわまわる消費財生産の余剰額を示す）にかんしては意味がよくわからない．

このコメントに関連して，司会役をおりていたマシューズが，とくに第３表第３項目について意味がよくわからなかったとして，マルクス経済学と西側の経済学の相異に言及しつつ，国民所得計算の方法を問いただした．

これにたいして，70歳近い好好爺という感じのソローキンがようやく女性秘書を伴なって登壇して答弁した．第１表にかんしてはソ連経済の生産力発展のダイナミックスを示そうと試みたものであると述べ，第２表にかんしては，砂糖生産部門はロシアでは19世紀初めに生れた若い産業部門だからのせたと述べた．この答を聞いて筆者は，第２表はことさら社会主義の生産力の高さを印象づけようとする非常に恣意的な表だという感じをもった．第３表にかんしては議論はまったくかみあわなかった．間に入った女性秘書はなかなかうまく説明できず苦労していたが，ソローキンの方はそんなことにはおかまいなしに，拡大再生産の物質的基礎うんぬんといったわかりきった話に終始した．司会をつとめた副座長の大川一司氏が再三，質問の要点をくりかえしたが，ソローキンから納得のいく説明が聞けなかった．司会

(18) *Ibid.*, p. 9.

の大川一司氏が最後に言った I regret that I can't understand that. という言葉が印象的であった.

筆者をも含めて社会主義経済研究者にとって最大の呼物は，第4分科会のA・G・アガンベギャンの報告であった. 彼の報告は4日目の午前の部の冒頭，すなわち9時からであった. 前日さまざまの分科会に散っていたわが国の社会主義経済研究者もこのときばかりはこの分科会に集まった. アガンベギャンの知名度のなせるわざである.

少し横道にそれるが，アガンベギャンについて紹介しておこう. 彼はソ連の代表的な数理経済学者で，多分まだ40代後半位の若さであるが，すでにソ連邦科学アカデミーの正会員であり，科学アカデミーのノヴォシビルスク支部で研究に従事している. これだけで注目に値いするが，彼の優秀さを示すエピソードを記すと，就任間もないコスイギン首相がわざわざモスクワからノヴォシビルスクまで飛んで来て，ゴスプラン（国家計画委員会）の議長に就任してくれるよう要請したのに，彼は断ったとのことである(19).

話を元に戻すこと，アガンベギャンの報告はスライドを使いながら行われた. 関取を思わせるほど腹のつき出た巨漢で太い眉毛をしたアルメニア人のアガンベギャンはたどたどしい英語で，シベリアの内蔵する大きな資源，潜在的可能性，ソ連経済にしめるシベリアの位置，そしてシベリアが開発されたらソ連経済がいかに発展するかを語ってくれた.

彼の報告にたいして3人の参加者から質問があった. 最初の質問者はフランス人の学者（名前は不明）で，質問の趣旨は，シベリア開発は大量の水を必要とするであろうが，いったいどのように確保するのか，もし仮りに水を北極海から得るようにしたら，それは異常気象を招きはしないか，というものであった.

二番目の質問者は佐藤経明氏（横浜市大教授）で，質問は英語でなされた. 佐藤氏の質問の趣旨は次の通りである. 私はここでは Academician Aganbegyan の報告しなかった点について述べたい. われわれは壮大なシベリア開発計画の話を聞いたが，われわれが本当に聞きたかったかったのは計画の方法論であった. われわれは Academician Aganbegyan を尊敬してきたし，期待していただけに，それが聞けなくてたいへん残念であった.

三番目の質問者は山本敏氏（明治大教授）で，彼はロシア語に堪能な人ではあるが，ロシア語はこの世界会議の公用語とはされていないので，日本語で質問を行ない，そのあと日本人通訳が英語に直した. 山本氏の質問はだいたい次のようなものであった. シベリアの都市の年齢構成を見ると若い世代がたいへん多い. シベリア開発は今後もなお大量の労働力を必要とするであろうが，労働力確保という点でいまの問題をどう考えたらよいか. また，シベリアには多くの少数民族がいる. わが日本でも少数民族のアイヌがいるが，われわれは彼らを絶滅寸前にまで追いこんでしまったという苦い経験をもっている. シベリア開発はそれに伴なって当然少数民族の問題を提起するだろうが，その問題をどのように考えているか.

---

(19) この話は，筆者が12年ほど前まだ学部学生であったとき，公文俊平東大助教授から演習のおり聞いた伝聞である.

これらの質問が全部終ったあと，アガンベギャンが立ち，まず最初に I apologize my poor English. と前おきしてから，さきほどのフランス人の質問にたいして，「水の問題は心配ない．十分確保できる．」と答えたのみであった．佐藤氏の質問にたいしては，御期待にそえず申しわけないと答え，山本氏の質問にたいしては山本氏に向って，あとで個人的にお答えしましょうと述べただけで質疑応答は終った．

そのあと筆者は第２分科会へ顔を出し，Ｅ・Ｉ・カプスティン（ソ連邦科学アカデミー准会員，科学アカデミー付属経済研究所所長）の報告を聞いた．ここでも例のソ連の女性が活躍した．カプスティンも英語がにが手らしく，演壇に女性秘書をつれてきて，自分はロシア語で話し，ひとくぎり，ひとくぎり，彼女に英語に直させていた．ロシア語と英語が交互に，めまぐるしく飛びかうので，彼の報告は非常に理解しにくかった．報告が終っても誰からも質問はなかった．

各分科会ともだいたい４日目の午後から寄稿論文の報告に移った．最初にもらったプログラムによると，４日目は夜の10時までやるように書いてあって，いかにもこの日はきつそうに思われたが，すべての分科会が実際に10時までやったのではないようである．筆者がこのとき出席していた第１分科会は夜８時頃終った．そのかわり，各報告者はやけに早口で話し，終っても質問もなく，司会者のＲ・Ｃ・Ｏ・マシューズは次から次へと報告者の名前を呼びあげ，まるで報告のオン・パレードであった．あとで，このとき報告したユーゴスラヴィアの学者から聞いたところによると，まえもって司会者から１人10分間と制限されていた，とのことであった．

最終日の９月３日（土）の午前はふたたび全体討議であった．２日間の分科会での討論の模様が各分科会の座長から紹介された．第１分科会についてはＲ・Ｃ・Ｏ・マシューズ（英），第２分科会はヘルベルト・ギールシュ（西独），第３分科会はモゲンス・ボーゼラップ（デンマーク），第４分科会はハチャトゥーロフ（ソ連），第５分科会はイルマ・アーデルマン（米），第６分科会は都留重人，の各氏がおこなった．それぞれについて座長より総括的な発言がなされて，全体討議は終った．

午後から閉会式がおこなわれ，新会長に決ったばかりの都留重人氏があいさつをし，1980年に第６回世界会議が開かれることになったメキシコの代表Ｒ・ベルセリル・ストラッフォン教授があいさつし，「1980年にまたメキシコ・シティで会いましょう」と結んで，第５回世界会議は終了した[20]．

最後に筆者の感想をいくつか述べさせてもらいたい．

---

(20) なお，新しい副会長にはフランコ・モジリアニ教授（米）が選ばれた．第６回世界会議は「人的資源と経済発展」を統一テーマにメキシコで1980年８月後半に開催されることに決った．そのほか，少人数の専門家による円卓会議が1978年，1980年に開催されることも，第５回世界会議開幕前日の８月28日の執行委員会で決った．Bulletin. No. 2. Published by the IEA Secretariat and Local Organizing Committee, August 30, 1977.

第1に，ＩＥＡの世界会議はなかば社交の場という性格をもっているという印象をうけた．これは，ＩＥＡがその目的を「学術集会を組織することを通じて，共同研究プログラムを通じて，また当面する重要な問題にかんする国際的性格をもつ出版という手段によって，世界の異なる地域の経済学者たちの間の個人的な接触や相互理解を促進すること」[21] と規定していることにも合致している．その点では，公式の会議だけでなく，初日の夜に開かれたレセプション（於東京プリンス・ホテル）と最終日の夜に開かれたバンクェット（於椿山荘）もたいへん有益であった．書物や論文だけで知っていた外国の学者と面識を得ることができたし，研究上の情報交換の場としても役にたった．同時に，この世界会議は活発な議論の場でもあった．必ずしもすべての報告をめぐって活発な議論がおこなわれたわけではないが，おおむね活発な議論がなされ，ときには初日の全体討議でのバッチャ報告をめぐっておこなわれたような，社会体制，政治的立場のちがいがぶつかりあうような面もあった．

第2に，討論の進め方について．われわれがこれまで経験してきた日本の学会では，若干の（または土地制度史学会の場合のように厖大な）統計資料と報告にかんするごく簡単なレジュメとともに報告者が長時間（50分から1時間半の）の報告をし，討論にはあまり時間をさけなかったのが通例であったように思われる．それとは対照的に，この世界会議は報告者の論文がタイプ印刷されて事前に参加者に配布され（もっとも，それら全部に目を通すのは必ずしも容易ではないが），報告者は自分の論文を全部読みあげるのではなく，自分の論文の要点のみを短時間（20～30分）で説明するにとどめ，討論に多くの時間をさいた．こういう点は，日本の学会も参考にしてもよいのではないかと思われた．

第3に，世界会議の運営のしかたが参加者にとって，いたれりつくせりで，たいへんありがたかったということである．1時間半討論すると30分間休憩があり，また1時間半討論するというやり方，そして昼休みはたっぷり2時間半とるというやり方は，中味の濃い討論のあとゆっくり緊張をほぐすことができ，気分的に楽であった．また毎日1回コーヒー・ブレークが午後に（最終日のみ午前）あり，このときは参加者全員が自由にコーヒー，紅茶，ジュースを飲むことができた．それは談欒や情報交換の場でもあった．そしてまた組織委員会などの裏方がたいへんしっかりしていて，参加者全員に pigeon box（私書箱とでも言うものだろうか）が用意されていて，そこへ行けば，組織委員会が毎日発行する Bulletin や追加の資料やその他の情報が得られるしくみになっていた．もっとも，このようなサービスは大きな財政的裏づけがあってはじめて可能であり，日本の貧乏学会では望むべくもない．

第4に，われわれはよくソ連・東欧と一括しがちであるが，それは正しくないということをこの世界会議で強く印象づけられた．ソ連の学者の報告は共通して，タテマエのレベルでの議論に終始し，プロパガンダ的であったという印象を禁じえなかった．社会主義経済のような計画的運営でやればこのようにうまくいくのだ，ということが強調されるのだが，それは原理的にはなるほどとわかっても，さて現実にはそれだけでは説明できないさまざまの具

(21) AEN, August 31, 1977, Special Supplement.

体的な諸問題をどのように説明してくれるのか，というと，さっぱり説明してくれないのだから，われわれとしてはたいへん物足りない思いがした．それにひきかえ，ハンガリー，ポーランド，チェコスロヴァキア．ユーゴスラヴィアなどの東ヨーロッパの学者は，自分たちが直面している問題を明らかにし，それにたいして自分たちはどのように解決しようとしているかを卒直に語っており，そういう姿勢はたいへん好感がもてた．彼らの発言はたいへん卒直であったが，筆者がとくに強く印象づけられたのは，バンクェットでポーランドのミエシチャンコフスキー教授（ワルシャワ財政大学）と会って話したときのことである．筆者の専門が社会主義経済論とりわけソ連の第１次５カ年計画期（1928～1932年）の工業化と農業集団化についての研究だと述べると，彼はプレオブラジェンスキーやブハーリンはもっと研究されるべきだと言うのである．このようなことはソ連の学者は決して言わないし，書かないことである．さらに言うならば，ソ連の学者はみな英語はうまくないが，他方，東欧の学者は英語がうまく，しかも社交的である．最初の方で強いロシア語なまりの英語を話すと書いたハチャトゥーロフがそれでも一番流暢に英語を話していたのである．こういうことはおそらく，社会主義諸国のなかではロシア語は，資本主義世界での英語と同じく，共通語的位置をしめているのでソ連の学者はロシア語だけで用がたりているという事情によるのではないか．それに反して，東ヨーロッパの学者は自国が小国であるため，たえずまわりの外国と友好的であるべく苦労をしてきており，またかって閉鎖的であったソ連の学者とはちがい，はやくから西側諸国へよく他流試合に行ってもまれている，ということによるのかもしれない．

第５に，外国の学者と意見交換をするとき，相手からは英文の論文があるか，とたずねられるが，日本語で書いたものしかないと答えると，残念だけれどもそれでは読めないと言われ，議論があまり発展しない．本当に学問のうえで国際交流を深めようと思うならば，われわれは世界の共通語である英語で論文を書かなければならない，ということを痛感させられた．

筆者は短期間ではあったが，この世界会議に参加して大きな収穫とても大きな刺激をうけて帰ってきた．

あ と が き

冒頭にも書いたように，大学教官の年間の出張旅費をうわまわる旅費を別枠で文部省よりもらってこの世界会議に参加した以上，何か報告の文書を書くことが自分の義務であるかのように考え，この記録をまとめた次第である．世界会議でのペーパー，新聞，筆者のメモ，テープ（ソローキン報告のみ）のほか，記憶に頼りながらこの記録をまとめた．なにぶん，あれ以来だいぶ日がたっているので，表現に正確さを欠く箇所があるかもしれないが，その点は御容赦願いたい．　（1978．1．8．）

追　　記

この記録をまとめたあと日本学術会議，日本経済学会連合，財団法人統計研究会より『ＩＥＡ第５回世界会議報告書』が発行された．あわせて参照されたい．　（1978．3．1）